「彼岸過迄」
――言葉と意識――

中村　完

一

この作品は、語り手の田川敬太郎が友人須永市蔵の紹介してくれた市蔵の叔父田口の世話で職を得、田口家に出入りするうち田口の長女千代子を知り、市蔵・千代子の叔父松本を知る経過のなかで、市蔵の自己語りを主軸に千代子・松本の傍証をききながら、市蔵の心底の道筋を見とどける、といった大枠のなかにある。そして、市蔵の心理的実像が各自の回想を梃として浮きあがるしくみになっている以上、作品が進行する現在時の表出と回想による過去の喚起とをかさねる、時間多重の重層構造となるのは必然のことなのだ。

時間軸を中心とする展開平面の整序については、高木文雄・宮井一郎氏以来、秋山公男・酒井英行・寺岡健一ら諸氏の指摘が時間的整序の撞着を修整した上、その構成軸が生む作品の重力を正確に測定するところまできている。「彼岸過迄」における市蔵中心の時間的経過を「年立」として納得のいく整理をしたのは、酒井氏の「『彼岸過迄』の構成」[1]である。

私としては、それはそれとして、清水孝順氏が市蔵について、「彼は女中の子として生れ、さらに何も知らないう

ちに結婚の約束までかわされていたという。その人生が生れながらにして異常な運命を負わされている点、恐るべきアポロン＝太陽神の呪いで、暗黒の運命を予言されたオイディプス王と類似の構造がある」と、作品を大きくひらき、そのひらいた眼で「自我内部に屈折する自意識は、自意識それ自体に照り返して、無限に内部に沈降していかざるをえない」とし、須永の「真に近代的な意味での運命のアイロニイ」を凝視する作業[2]に共感する。意識の病源を知ることが意識の全体をひらくことになるその全経過を「知る」行為が動力源となってみちびく。「オイディプス王」と「彼岸過迄」、動・静の差こそあれ、意識設定の基準を共有しているのではないか。

人間が人間であるかぎり、誰もが市蔵のそれに似た出発をし、似た境涯を生きる可能性がある。出生の秘密を潜伏させながら、それが何かを知る術もなく生きる意識の純粋持続、こうしたふかみに痼疾をかかえた意識の純粋持続は、世間が指定する日常の役割をひきうけることで解消されるはずもない。出生前の未知の事故を知らずしてそれに拘わる市蔵や、既往の記憶に拘わりぬく「心」の先生が、身柄不拘束、無職の状態で生きていくのは、自分のなかの自分を見つづけ、見つくすための特定された条件にほかならない。

二

「彼岸過迄」を読みおえて気づくのは、作中人物の名に、それぞれ、意味の付托があるらしいということである。田川敬太郎と同宿の森本は心のなかに野性の「森」を求めて日本列島を脱出するものであり、田口は産業区画水田のごとき実業界への入口として田川の人生の流れを導くものであり、松本は自立の一本松として知識人群生にそびえながら時を待つもの、ということになろうか。そう考えると、須永市蔵は、永きにわたって意識の底に特別の記憶を貯蔵し集積し、それがひらかれるのを待つ男、とでもいうべきだろう。敬太郎が何度か往復した「須田町の方から右へ小さな横町を爪先上りに折れて、二三度不規則に曲つた極めて分りにくい所」にある市蔵の居宅のわかりにくい位置も、「極めて分り悪い所」のある市蔵の意識のそれを連想させるのだ。「停留所」の「二」に「庭に植ゑた松の枝と、手斧目の付いた板塀の上の方と、夫から忍び返しが見えた。

縁に出て手摺から見下ろした時、敬太郎は松の根に一面と咲いた鷺草を眺めて、あの白いものは何だと聞いた事もあつた。」とある。この「松」と「鷺草」のある庭を拡大すると、ほとんどそのまま、「行人」の一郎が見る鎌倉紅が谷の風景となろう。市蔵はこの小景に見入りながら、大景のなかに立って意識の貯蔵庫をひらく、そういう「時」を待っていたのかもしれない。

さらにいえば、敬太郎が田口に命じられて松本や千代子（それが松本・千代子とわかるのは「報告」の章である）を待つ神田小川町の丁字路も、市蔵の意識の底の丁字路の表象、というふうにみえてくるのだ。そこで人を待ち電車を待つのは敬太郎だけではない。市蔵もまた、そこに立ち、ひらきようのない意識の持主として、田口家や松本家に通じる電車を何度も待ったのである。やがて、田口家に出入りすることになる敬太郎が、このおなじ丁字路で、何かを待って立った市蔵の心のうちを考えたことがあったろうか。

敬太郎が松本と千代子を待つ事実をさえ、そのときの市蔵は知らない。市蔵があとで知らされるのは、このことにかぎらない。市蔵はかれの出生の秘密を積年の疑惑のはてに知らされるのだ。このうごきのとれない生存事情の全体がかれの「運命のアイロニイ」であったといえよう。敬太郎が「待つ」のは実業の世界に浮かぶための自意識の一時的一過性の緊張であり、市蔵が経験するのは、意識の底に押しこんだおもい記憶におびえながら、その意識の根底からの自己開放を「待つ」ことであった。この落差が、市蔵・千代子・松本の語りを待つ敬太郎と、自己が自己を語る時を待つ市蔵との落差であり、作品の表層と深層を構成する落差なのだ。そしてこの落差が、現在時の「今」に回想によって掘りかえした「昔」をかさねる時間の二重構造を要求することになる。

敬太郎が松本と千代子を待って見とどけた「停留所」の経験を田口に報告するのは「報告」の章においてである。このとき、すでに、敬太郎は「見た」こと、「聞いた」ことを報告者の言葉で伝達する立場を得たことになる。しかし、このときの敬太郎が報告したのは松本と千代子の外見であって、かれの言葉は二人が市蔵の意識の開閉にかかわる最重要の縁者である事実に及ばない。要領を得ない報告を田口に注意されて敬太郎がいう。「要領を得ない結果許りで私も甚だ御気の毒に思つてゐるんですが、貴方の御聞きになる様な立入つた事が、あれ丈の時間で、私の様な迂

闊なものに見極められる訳はないと思ひます。斯ういふと生意気に聞こえるかも知れませんが、あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直に会つて聞きたい事丈遠慮なく聞いた方が、まだ手数が省けて、さうして動かない、慥かな所が分りやしないかと思ふのです」。敬太郎のこの言葉の意味するものを田口は「貴方に夫丈の事が解つてゐましたか」と受け、「貴方のいふ方法が最も迂闊の様で、最も簡便な又最も正当な方法ですよ。其所に気が付いて居れば人間として立派なものです」と褒めはげます。

敬太郎は田口のこの助言をふまえたところから、「人間として立派なもの」であること、「最も正当な方法」をとることを伝達者の心得として生きることになるだろう。かれが実業としての「探偵」から人間の心の「探偵」になっていくのも、ここのところからである。

「最も正当な方法」として田口は敬太郎を松本に紹介するが、最初は「雨の降る日」に訪れて面会をことわられる。再度の訪問で敬太郎は松本の人柄にふれ、「松本に二人の姉があつて、一人が須永の母、一人が田口の細君」であり、松本が「田口の義弟に当る」という関係を知らされる。こうして松本との縁が成立したあと、田口家への往来がつづき、敬太郎は千代子とも親しくなる。そして、須永の家に行きあわせた千代子から「雨の降る日」のことをきく。田口に認められた敬太郎を話し相手とすることで、千代子も松本も市蔵の現在・過去・大過去を語りやすい心境になっていくのではなかろうか。市蔵もかれについて語るものの善意を感じながら、しだいにおちついていくのであろう。

三

「雨の降る日」に松本家に起きた事故は、前述の酒井氏の「年立」によると、市蔵の「大学四年十一月」のこととなる。市蔵が「鎌倉で高木に嫉妬し、東京に帰つて千代子と衝突を起こ」したのは、これも酒井氏によれば、「大学三年から四年に上がる夏」のことであった。そして、敬太郎が市蔵と同席するところで「雨の降る日」のことを千代子からきく今は、市蔵卒業後の、「翌年の二、三月頃」である。とすれば、今の市蔵は千代子との同席をこばまない、緊張を解いた心しずかな状態にあった、とみてよかろう。

松本家の四女宵子がこよなくかの女を愛する千代子の膝の上で、食事の途中、忽然として逝ったのは「雨の降る日」

のことであった。このとき、千代子は心打たれて五度泣いている。千代子は心底からしっかり泣き、しっかり笑う女だったのである。骨上げの日に、宵子の死に泣くことのなかった市蔵は、千代子に「貴方の様な不人情な人は斯んな時にはいつそ来ない方が可いわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すぢやなし。」といわれる。千代子からすれば、もちろん、いやみで言ったのではなく、悲哀を共にすることのない市蔵の感情のかたさを責めたまでであろう。こういう一途な責め方に、千代子の心底に無自覚のままひそむ市蔵へのあまえが現われているのかもしれない。

市蔵は市蔵で、骨上げの用意ができたことを伝えにきた千代子にいう。「あの竹藪は大変見事だね。何だか死人の膏が肥料になつて、あゝ生々延びる様な気がするぢやないか。此所に出来る筍は屹度旨いよ」。さらに骨上げのとき、市蔵は、ひとり言のようにいう。「斯うなると丸で人間の様な気がしないな。砂の中から小石を拾ひ出すと同じ事だ」。永く意識の貯蔵庫に感情を石のごとく閉じこめてきた、いかにも市蔵らしい言葉ともいえよう。人の死を汚すような、このあえてする冷徹なものいいに、冷徹を装わざるをえない市蔵の心の素顔がみえるのではなかろうか。冷徹にふるまっても千代子ならゆるしてくれる、というあまえがありはしないか。

人はすべて誕生のときから近親者の祝福・期待の言葉につつまれて育つ。そして、そうした尋常な言葉につつまれて生き、やがて死ぬ。市蔵は生の起点に謎をかかえたときから、「生」から「死」への尋常な道をさぐりかね、「生」の意味が見つからぬまま、「生」の意味を無化しようと力みながら生きてきたのではなかったろうか。このときも、宵子の生をはばむ死、死にはばまれた生を愚弄したのではなかった。「死」に照らされる「生」のはかなさを感傷的に語れなかったのである。「生」のマニュアルをつかめぬ精神史の起因はかれの出生のときにあったのである。

四

敬太郎が「須永の話」をきくのは、千代子から「雨の降る日」のことをきいた、その「次の日曜」であった。敬太郎の想像力は、しだいに、市蔵と千代子のかかえた「二人の中を離すべからざる因果」にせまりつつあった。

この日敬太郎は市蔵を郊外散歩にさそった。鴻の台には

じまる土堤道散歩の途次、二人は「水だの岡だの帆懸船だの」を見るのだが、市蔵は、まだ、我を忘れて外景に見入るほどのいすわった心境にはなっていない。内向状態はつづいていたのだ。しかし、市蔵自身が「『何うも自分ながら厭になる事がある』と快よく己れの弱点を承認する」以上、その「弱点」をかこもうとして意識全体で力むことは、もはや、あるまい。今は、自分で自分の意識をひらき、その根底を洗うことが大事と、かれは考えているからである。

市蔵の自己語りは父の死の回想からはじまる。それは父を回想する自分を回想することであった。

父は死にきわまる最期のとき、市蔵につぎの言葉を残したという。「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくちゃならないぞ」。きかされた市蔵が「僕は生れた時から母の厄介になつてゐたのだから、今更改めて父からそれを聞かされるのを妙に思つた」のは当然のことであった。母は母で、父の葬儀の日、父の遺した言葉に応ずるごとく、「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上げるから安心なさいよ」と市蔵にいう。この母の言葉に市蔵は「何とも答へなかつた」が、「妙に思つた」はずである。そして、この「妙に思つた」記憶は確実に残り、確実につづいた。「両親に対する僕の記憶を、生長の後に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人の此時の言葉であるといふ感じが其後次第々々に強く明らかになつて来た」という経過である。父と母、二人の言葉が出合ってつくる謎は謎のまま疑惑を伴って意識の底にいすわり、ふくらみ、意識全体を内側から押し、意識そのものの破綻にいたる予感を市蔵にもたらしたはずである。こうして、市蔵緊張の状態は、叔父の松本から市蔵が出生の秘密をきくまでつづく。言葉でかこまれた秘密は言葉でひらかれるまでつづくのだ。

市蔵の自己語りの最初のところで、注目しておきたいのは、とくに母との関係史を語るにさきだって、「母の性格は吾々が昔から用ひ慣れた慈母といふ言葉で形容すれば、夫で尽きてゐる。」といいきり、不動の「慈母」観を敬太郎に念押ししている事実である。出生の秘密を知った今も、市蔵は、この育ての母に感じてきた「慈母」の純度を不動のものとして大事にしているのだ。

市蔵の自己語りは進んで、意識史の核心を語る第二段に移る。ここでは、市蔵の母と千代子の母、二人の言葉が交叉して市蔵の意識のなかの謎に謎を加重する。

いつの頃のことだったか、市蔵は母から、千代子が生まれたとき、「大きくなつたら此子を市蔵の嫁に呉れまいかと田口夫妻に頼んださうである。母の語る所によると、彼等は其折快よく母の頼みを承知した。」云々のことをきかされていた。その後、市蔵・千代子双方に結婚の話が出はじめたころ、田口の家で市蔵・千代子・千代子の母、三人の間につぎのような会話があった。

「市さんも最う徐々奥さんを探さなくつちやなりませんね。姉さんは疾うから心配してゐるやうですよ」

「好いのがあつたら母に知らして遣つて下さい」

「市さんには大人しくつて優しい、親切な看護婦見た様な女が可いでせう」

「妾行つて上げませうか」

「御前の様な露骨のがら〳〵した者が、何で市さんの気にいるものかね」

会話をしめくくる叔母の最後の言葉のつよさが市蔵の「自尊心」をつらぬく。叔母の言葉に意味するところ測りかねるものがあるにせよ、叔母が千代子と市蔵との結婚を否認するかのように市蔵はきいてしまったのである。市蔵はここでは、さきに聞いた母の言葉と叔母の言葉と、この二人の言葉にひき裂かれるのだ。そして、最初の、父母の何かをかくすような言葉が残した謎にかさなるように、叔母のこの言葉も、市蔵の意識をふかく降りていく。しかし、千代子は、快活・率直の気質のおもむくまま、「田口と僕の家が昔に比べると比較的疎くなつた今日でも、千代子丈は叔母さん叔母さんと云つて、生の親にでも逢ひに来る様な朗らかな顔をして、しげ〳〵出入りして居た。」と市蔵が敬太郎に語る現在も、そのころと同様、須永家に出入りをつづけている。市蔵のいうごとく、「僕は彼女から清いもので自分の腸を洗われた様な気持がした場合が今迄に何度もあつた」記憶は、大学卒業後の今も市蔵のなかに生きているのだ。

ともかく、市蔵と千代子の心の紐帯は、ちぐはぐながら、今も、断たれてはいないのである。意識の底の謎にひきつけられて自己を容易にひらくことのできない市蔵と怖れもなく自己をひらく千代子とには、意識の丈の深浅があるだけである。不安定な自己意識のなかにとじこもる男と、無規定な自己意識にためらわぬ女と、この外見の差を人は性格の差として誇張してきたし、市蔵当人も、自身の意識の様態にとらわれて、その嫌人癖を本来の性格として誇張し

てきたのだ。

五

市蔵の自己語りは回想の時を追って、鎌倉ゆきの段に移る。市蔵が「大学三年から四年に移る夏休みの出来事」である。市蔵と市蔵の母が、田口一家が避暑地に借りた鎌倉の家に招かれて過ごした、その二日間に起こった「出来事」である。

市蔵はその家に着いたとき、座敷に田口の家族にまじって「白い浴衣を着た男のゐる」のを見るが、「座敷に通つたそのときには、すでに「彼の姿は見えなかつた」。このとき市蔵は、はやくも、「ある一種の不安」を感じる。市蔵は千代子にきいて、その男高木が近所に住んでいることを知る。やがて出直してきた高木を中心に団欒に似た会話がすすむのだが、市蔵は「自由に遠慮なく、しかも或程度の品格を落す危険なしに己を扱かふ術」を心得た高木をみているうちに、「僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかつた。話をする所を聞いて、すぐに及ばないと思つた」「彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せ付ける様な態度で、誇り顔に発揮するのではなからうかといふ疑ひが起つた。其時僕は急に憎み出した。」といった心理過程をたどる。すでにこのとき、市蔵に「凍結した形にならない嫉妬が潜んでゐた」のである。そして「僕の嫉妬心を抑へ付けなければ自分の人格に対して申し訳がない様な気がした。僕は存在の権利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。」とあるように、市蔵自身、「誰にも見えない腹の中」にうごく「嫉妬心」をすでに自覚していた。

翌朝、叔父の田口が一行六人を引率してはじまった舟遊びのときも、市蔵は舟中に展開する千代子と高木のうごきをみながらの反応を「誰にも見えない腹の中」にしまいこむだけで、海上の眺望をたのしむことも海底の魚を覗くこともほとんどしない。海底のぞきを避ける市蔵の姿に、意識の底に濃縮された「嫉妬心」を見まいとする力みを感じる読者もあろう。

帰京した市蔵は「嫉妬心だけあつて競争心を有たない僕」をおちつかせようとするが、「千代子と僕に高木を加へて三つ巴を描いた一種の関係」図は丁字の形をとり、かれの意識を底から裂く原因として残った。小間使の作がかもす

「気安い、大人しやかな空気」にふれて気分の整いかけた市蔵は心ゆくまま本棚の整理にかかり、偶然に棚の奥に発見したアンドレーエフの『ゲダンケ』を読む。「或る男」が、ひそかに愛していた女がかれの友人の妻となったあと、狂人を装い、その妻の面前で友人を文鎮で打殺す、という筋の話である。この筋書を反芻して、「平生の自分と比較して、斯う顧慮なく一心に振舞へるゲダンケの主人公が大いに羨ましかつた。同時に汗の滴る程恐しかつた。」と、「自分」を怖れたあと、市蔵は「千代子の見てゐる前で、高木の脳天に重い文鎮を骨の底まで打ち込んだ夢」を見る。市蔵の「誰にも見えない腹の中」の「高木に対する嫉妬」に連動し、そこから浮上した白昼夢である。

市蔵の帰京を追うように市蔵の母が千代子に伴われて帰京し、三人がおだやかに過ごした翌朝、市蔵は髪を島田に結って鎌倉に帰りかける千代子に言う。「まだみんな鎌倉に居るのかい。」「えゝ。何故」「高木さんも」、といったやりとりのあと、「高木さんも」ときいて表情を変えた千代子がいう。

「あなた夫程高木さんの事が気になるの」

「貴方は卑怯だ」

「卑怯」の意味を市蔵がきく。「卑怯の意味を話して上げます」と千代子がいう。ここで意を決した千代子は、泣きながら、市蔵の「卑怯」を説明する言葉で、「卑怯」―「嫉妬心」をかくそうとする市蔵の意識をその根底までひらくのだ。

「貴方は妾を御転婆の馬鹿だと思つて始終冷笑してゐるんです。貴方は妾を……愛してゐないんです。つまり貴方は妾と結婚する気が……」

「そりやあ千代ちゃんの方だつて……」

「まあ御聴きなさい。そんな事は御互だと云ふんでせう。そんなら夫で宜う御座んす。何も貰つて下さいとは云やしません。唯何故愛してもゐず、細君にもしやうと思つてゐない妾に対して……」

「御前に対して」

「何故嫉妬なさるんです」

「貴方は卑怯です、徳義的に卑怯です。妾が叔母さんと貴方を鎌倉へ招待した料簡さへ貴方は既に疑つて居らつしやる。それが既に卑怯です。が、それは問題ぢやありません。貴方は他の招待に応じて置きながら、何故平生の様に愉快にして下さる事が出来ないんで

す。妾は貴方を招待した為に恥を掻いたも同じ事です。貴方は妾の宅の客に侮辱を与へた結果、妾にも侮辱を与へてゐます」

「侮辱を与へた覚はない」

「あります。言葉や仕打は何うでも構はないんです。貴方の態度が侮辱を与へてゐるんです。態度が与へてゐないでも、貴方の心が与へてゐるんです」

「そんな立ち入つた批評を受ける義務は僕にないよ」

「男は卑怯だから、さう云ふ下らない挨拶が出来るんです。高木さんは紳士だから貴方を容れる雅量が幾何でもあるのに、貴方は高木さんを容れる事が決して出来ない。卑怯だからです」

こうした相手の心底にとどく言葉の応酬のあったあと、なお、現時点の市蔵・千代子が心の提携を失っていないことは、前段の「雨の降る日」に見た通りである。それだけでなく、市蔵は、きき手の敬太郎に、千代子に「卑怯」を突かれた事実と「嫉妬心」にうごかされた事実とをいつわることなく語り、語りつくすことで、わが自閉の意識史に不可逆の杭を打ちこもうとしているのだ。

六

「須永の話」につづく「松本の話」は、市蔵が千代子との衝突にきわまる経過を語ったあとを受けて、叔父の松本が市蔵にかれの出生の秘密を明かすところまでを敬太郎に語る。作者は、はじめから、松本を市蔵出生後の母と子の紐帯を最もよく知る者とし、かれに三家系の歴史を包括的に語る役割を予定していたのである。松本は市蔵の母、千代子の母共通の弟でもあった。そして、幼時からの市蔵と千代子を最もよく知る人であった。

松本ははやくから市蔵の「世の中と接触する度に内へとぐろを捲き込む性質」を知っていた。そして、この求心的な意識作用がもたらす「この不幸を転じて幸とするには、内へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐろを捲き出させるよりほかに仕方がない。」と考えていた。

「市蔵の卒業する二三ケ月前」（市蔵・千代子の衝突があったのは市蔵が「大学三年から四年に上がる夏」）松本が市蔵の母にたのまれて市蔵に千代子との結婚の話を出し、「もし田口が遣つても好いと云ひ、千代子が来ても好いと云つた

ら何うだ」と言ったところ、暫時の沈黙ののち、市蔵は「自分は何故斯う人に嫌はれるんだらう」と言ったという。そのあと両者の間に展開した対話の経過を松本はつぎのように再現する。

「ぢや誰が御前を嫌つてゐるかい」

「現にさういふ叔父さんからして僕を嫌つてゐるぢやありませんか」

「おれが何で御前を悪む必要があるかね。子供の時からの関係でも知れてゐるぢやないか。馬鹿を云ひなさんな」

松本は市蔵の鋒先をかわそうとして、「おれは御前の叔父だよ。何処の国に甥を憎む叔父があるかい」と言ったそのとき、市蔵の顔に浮かんだ「淋しみの裏」の「軽侮の色」を見る。そして言葉の補強にとりかかる。

「御前は相応の教育もあり、相応の頭もある癖に、何だか妙に一種の僻みがあるよ。夫が御前の弱点だ。是非直さなくつちや不可ない。傍から見てゐても不愉快だ」

「ぢや左ういふ弱点があるとして、其弱点は何処から出たんでせう」

「そりゃ自分の事だから、少し自分で考へて見たら可からう」

「貴方は不親切だ」

市蔵がこの一語にこめた「沈痛な調子」に松本は心の根底をうごかされる。

「僕は貴方に云はれない先から考へてゐたのです。仰しやる迄もなく自分の事だから考へてゐたのです。誰も教へて呉れ手がないから独りで考へてゐたのです。僕は毎日毎夜考へました。余り考へ過ぎて頭も身体も続かなくなる迄考へたのです。夫でも分らないから貴方に聞いたのです。貴方は自分から僕の叔父だと明言して居らつしやる。それで叔父だから他人より親切だと云はれる。然し今の御言葉は貴方の口から出たにも拘らず、他人よりも冷刻なものとしか僕には聞こえませんでした」

市蔵が落涙とともに語る「毎日毎夜」考えに考えた経過をつつみかえす言葉は、もはや、松本にはない。松本に残されているのは、謎に躓く経過をかくしてきた市蔵に、謎をかくしてきた自分をひらいて向き合うことだけである。

「僕は僻んでゐるでせうか。慥かに僻んでゐるでせ

う。貴方が仰しやらないでも、能く知つてゐる積です。僕は僻んでゐます。僕は貴方からそんな注意を受けないでも、能く知つてゐます。僕はたゞ何うして斯うなつたか其訳が知りたいのです。いゝえ母でも、田口の叔母でも、貴方でも、みんな能く其訳を知つてゐるのです。唯僕丈が知らないのです。唯僕丈に知らせないのです。僕は世の中の人間の中で貴方を一番信用してゐるから聞いたのです。貴方はそれを残酷に拒絶した。僕は是から生涯の敵として貴方を呪ひます」

松本はここで意を決して、市蔵にかれとかれの母とが「本当の母子ではない」ことを打明ける。「二十五年以上も経つた昔」、「小間使が須永の種を宿した」こと、母が「子供丈引き取つて表向自分の子として養育した」こと、それが自分だ、という事を市蔵は、このとき、はじめて知ったのである。実母がこの世にないことも市蔵は知った。

出生の秘密を暗示する父と母の言葉に裂かれることではじまった市蔵の自閉への収縮は、こうして、その事実を直指する松本の言葉によってひらかれたのである。

「僕は貴方の御話を聞く迄は非常に怖かつたのです。胸の肉が縮まる程怖かつたです。けれども御話を聞いて凡てが明白になつたら、却つて安心して気が楽になりました。もう怖い事も不安な事もありません。其代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる様な気がします」

「だつて御母さんは元の通りの御母さんなんだよ。おれだつて今迄のおれだよ。誰も御前に対して変るものはありやしないんだよ。神経を起しちや不可ない」

「神経を起さなくつても淋しいんだから仕方がありません。僕は是から宅へ帰つて母の顔を見ると屹度泣くに極つてゐます。今から其時の涙を予想しても淋しくつて堪りません」

「御母さんには黙つてゐる方が可からう」

「無論話しやしません。話したら母が何んな苦しい顔をするか分りません」

自分の淋しさを素直にひらいて叔父にいえる市蔵が、そのひらいた心に母の苦しみをつつもうとする子であることは、いうまでもない。市蔵の母は「二十五年以上も経つた昔」から不動の「慈母」として市蔵をつつんできたのであり、そのことを通して市蔵に人をつつむことの尊さをおしえてきたからである。

その後、卒業試験のおわった初夏のころ、市蔵は松本に会って、「京都付近から須磨明石を経て、ことによると、広島辺迄行きたいといふ希望」を述べる。そして、出かける。

市蔵が旅先から松本に宛てた第一報は、箕面の山や川を見たあと、立ち寄った休憩の場所で老女の関西弁をきき、「百年も昔の人に生れたやうな暢気した心持がしました。僅は斯ういふ心持を御土産に東京に帰りたいと思ひます」と伝える。こうして、二十五年前の出生を超える生のスケールが市蔵に育ちはじめる。明石からの第二報では市蔵は、海を見、海辺にあそぶ土地の客や芸者を見ての印象を述べたあと、「僕がこんな煩瑣しい事を物珍らしさうに報道したら、叔父さんは物数奇だと云つて定めし苦笑なさるでせう。然し是は旅行の御蔭で僕が改良した証拠なのです。僕は自由な空気と共に往来する事を始めて覚えたのです。こんな詰まらない話を一々書く面倒を厭はなくなつたのも、つまりは考へずに観るからではないでせうか。考へずに観るのが、今の僕には一番薬だと思ひます。」としるす。

市蔵が「旅行の御蔭で僕が改良した証拠」を得るのは「行人」の長野一郎のそれと同断である。そして「考へずに観るのが、今の僕には一番薬だ」と思うのも、一郎が「我を忘れる」ことから得たであろう自己開放の要諦に通じている。明石の海に面した「松山の上」を仰ぐ市蔵は漱石のなかで、鎌倉紅が谷で「谷一つ隔て、向ふの高い松」を仰ぐ一郎の姿を呼びおこしつつあったのではなかろうか。

「内へとぐろを捲き込む性質」を外にひらいて、「外へとぐろを捲き出させる」市蔵に与えられた作業仮設が、一郎のなかで、意識内下降から上昇に反転する自己開放の回路として成就するのは、「行人」の末尾においてである。

「彼岸過迄」の市蔵は、とにかく、意識の貯蔵庫をひらくところまで来たのである。

注

(1) 酒井英行『漱石　その陰翳』(有精堂　平成二・四)

(2) 清水孝純「『彼岸過迄』の構造」(『作品論　夏目漱石』双文社　昭和五一・九)